

# 夕暮れの風景

キャンバスに油彩 仏 10号



Georges Michel ジョルジュ・ミシェル(1763-1843)

17世紀オランダ風景画に影響を受け、フランスでいち早く自然に即した風景画を描いた。ルーヴル美術館でフランドル派やオランダ派の作品の修復をしているうちにその影響を受け、当時はまだ風車小屋しか見当たらないモンマルトルに住み、荒涼たるモンマルトル風景を描いた。ほとんど画壇から忘れられたまま世を去ったが、ルソーやデュプレに高く評価され、近代風景画の先駆者としてまた、バルビゾンの先駆者としても名を不滅のものとした。

バルビゾン派の先駆者・近代風景画の先駆者

# Georges Michel

ジョルジュ・ミシェル (1763-1843)



作品名 夕暮れの風景

種類 キャンバスに油彩

サイズ 41.5×53.5cm (仏 10号)

来歴 Corcoran Gallery of Art(ワシントンDC)  
Sotheby Parke Bernet(ニューヨーク) 1979年セール

## 略 歴

政治家でもあり、ロマン主義文学の指導者でもあったシャトーブリアンは、18世紀の末に、早くも芸術家たちに、自然の中へ出て行って、自然から直接学ぶことをすすめていた。彼は同一の風景を一日の異なった時間に、同一の風景を異なった季節に描くことをすすめていた。彼の忠告はイギリスのコンスタブルやターナー、フランスのバルビゾン派の画家たちの絵によって具現されるが、彼らよりも早く、同一の場所を様々な時間帯に、さまざまな角度から、自然に即して描いていた画家がいた。モンマルトルに住み、心にしみる荒涼たるモンマルトル風景を数多く残したジョルジュ・ミシェルである。

若い頃から17世紀オランダ風景画家たちにひかれていた彼は、つくりものではない、現実的な風景を最初に描いたフランス人といわれている。時代に先行しすぎていた彼は、生存中はほとんど世に受け入れられず、死後、ルソーとデュブレによってはじめて、正当な評価を与えられたという。

彼の絵には、初期の作品を除いては、サインが入られていない。「私は自分の絵にサインをしない。絵はそれ自身で語らなければならないから」と言明していたミシユルの絵は、彼の時代の中で、際立った特徴をみせている。光りを含む黄褐色の色調、荒々しい筆致、風車のあるモンマルトル風景、どれひとつとりあげても、十分にサインの役目をするものであった。そしてそれゆえに、当時のアカデミーに受け入れられるものはなにもなかった。彼はほとんどモンマルトル付近の風景しか描かなかったが、自分のすべてを描くためには、丘へ登り、そこからつづく小さな森の中を歩き、その近郊を訪れるだけで十分だと信じていた。1810年頃からはサロンへの出品もやめてしまうが、彼の絵はその後ますます力強くなっていったといわれている。彼の絵は、1879年にルーヴル美術館に迎え入れられ、近代風景画の先駆者として名を不滅のものとした。バルビゾン派での制作はしていないが、バルビゾン派の画家、バルビゾン派の先駆者ともいえる。

飯田昌平著・バルビゾン派の画家たち 村内美術館名品選より